

～現地調査の“いま・むかし”～
現地主義



アジア経済研究所の調査研究活動の伝統的手法である「現地主義」。研究者は現地ではどのような調査研究活動を行っているのでしょうか？

紅茶農園の労働者の出身地を訪ねて

スリランカ/インド

私は1965年9月～1969年1月、アジ研の海外派遣員としてセイロン大学に留学しました。留学する前から、スリランカのプランテーション農業の成立史に関心をもっていたので、紅茶農園を訪ね、生産の現場を調査したいと考えていました。その準備として、出国する前の1963年に、数名の同僚と新潟県西蒲原郡月潟村に住み込み、農村の調査経験を積みました。スリランカに着任した1965年11月、中央高地の大規模農園を十数カ所訪問した機会に、南インドからの移住労働者に面接調査を試みました。標高の高い丘陵に立地し、高級茶を生産する茶園では、労働者の90パーセント以上が、南インドからの移住労働者でした。それもタミル・ナードゥ州ティルチラパッリ県のカーヴェリ川左岸の農村から来た労働者が多いことがわかりました。そこで1967年1月から同県のアビニマンガラム村にも住み、実態調査を行いました。調査許可を取得するのには苦労しました。写真は、満月の夜に開かれていた村落パンチャayat裁判の光景です。この村の調査報告として、『共同体の経済構造』（新評論1975年刊）を刊行しました。



▲満月の夜に開かれていた村落パンチャayat裁判(1967年)

中村 尚司
(龍谷大学研究フェロー)

イラン/トルコ

豊富な人脈はホームシック対策の賜物

1994年、イラン・イラク戦争が終わって6年足らずの革命イランに単身20代で赴任しました。まだピリピリした雰囲気が残る頃で、外国人研究者は半分「スパイ」扱いでした。受入れ先の教授の腰が引けていて長期滞在許可が取れず、お役所はたらいまわし、入国ビザを細切れに延長しながら(毎月のように警察でアフガニスタン難民とともに「非欧米」枠の列に並び延長スタンプを押印してもらいます)それでも一年間粘りました。当時の海外派遣制度は「一時帰国不可」(そもそも滞在許可がないので出国できませんが)、ネットもなく市内電話もろくに通じないなか、孤独を癒すのは誰彼かまわずつくったイラン人の友人たち。夜討ち朝駆けで押しかけてご飯はほとんど他人の家で食べさせてもらいました(みなさま御恩は決して忘れません)。大金持ちから庶民までヴァラエティに富んだ人脈はこの頃のホームシック対策の賜物です。もっと粘るつもりが「残る任期を確実に全うできる国へ移れ」というアジ研の命令によって2年目は急遽イラン以上に縁故のないトルコへ転任となり、トルコ語を一から覚える羽目に。不安定な身分の流浪・艱難の2年間でしたがどんな時でも助けてくれる人はいて、白銀のアルポルズ山脈と碧水のボスポラス海峡とがいつでも懐かしい故郷のように思い出されます。



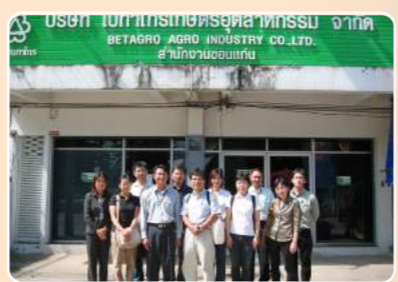
▲地方の絹糸卸売商の家で。商人や経済制度研究を始めた頃(1994年10月)

岩崎 葉子

一期一会のインタビューは頭脳と五感のフル稼働

タイ/ミャンマー/中国

私は中国の農村研究をしています。入所当時は中国語もできず、途上国での調査の経験もほとんどなかったため、先輩方には本当にお世話になりました。振り返ってみてとくに思い出深いのが、2005年に参加した共同現地調査です。農村研究の大先輩である重富真一さんと岡本郁子さんの引率でタイとミャンマーの農家やアグリビジネスを訪問し、夜は屋間に見聞きた事例について研究会メンバーで議論しました。印象に残っているのが、限られた調査時間のなかで先輩研究者が現地語を駆使し頭脳と五感をフル稼働させながら、問いへの答えに切り込んでいく緊張感や、臨機応変な対応能力でした。その後私は本格的に中国農村に入り始めましたが、政治的な理由から外国人の活動は厳しく制限されており、調査ができないこともしばしば。インタビューは一期一会と心得て、先輩方の集中力や忍耐力を思い出しながら臨んでいました。中国の農村調査は体力的にも精神的にも(宴会、方言、トイレetc.)かなりハードでしたが、研究会で鍛えられたおかげで、なんとか続けることができました。



▲タイ・コンケン県での共同現地調査(2005年11月)

山田 七絵

フィールドに潜む全体像理解への手ごかり

中国

私はアジ研で、中国の産業発展を追跡し続けてきました。入所当初、長江デルタ地域を中心に、専業市場とよばれる産業集積のなかの卸売市場の調査、その後は、深圳を中心に携帯電話やイノベーションエコシステムの調査を行いました。いずれの調査対象も、インフォーマル・セクターとして出発しながら、わずか数年で急速に産業高度化を遂げてきました。そのため、統計の整備が実態の変化に追いつかないという課題に、常に直面していました。こうした状況のなかで、フィールドワークが非常に有効な研究手段になりました。まず、統計資料が存在しなくても、フィールドには、往々にして研究対象の全体像に迫る手ごかりが秘められていました。例えば、江蘇省常熟市の専業市場調査でたまたま入手した経営者名簿には、出身地や取扱商品等の詳細データが含まれており、商人の地縁ネットワークの解明に非常に役立ちました。次に、フィールドでお世話になった方々が、経済成長に伴ってどんどん出世していくことも、次のステップの研究を進めるうえで非常にありがたかったです。例えば、深圳の山寨携帯電話機(山寨=模倣など非正規品)調査で出会った友人のうち、1人は大手スマートフォンメーカーの投資部長、もう1人はベンチャーキャピタル(VC)のマネージャーになりました。彼らのおかげでスマートフォン企業やVCの調査も順調に実施させていただきました。



▲深圳VC視察(2017年8月)

丁 可

モザンビーク

仲卸や露天商からネットワーク全体の理解へ

モザンビークの労働移民について研究しています。2018年からの海外派遣の間に私が注目していたのは、南アフリカ鉱山業で就労してきたモザンビーク人鉱山労働者の組合と、増大するインフォーマル・セクターの労働移民のなかでもとりわけ活発な越境貿易者(Informal Cross-Border Traders: ICBT)の組合でした。とくにICBTの組合や当事者への聞き取りでは、しばしば卸売市場に出向きました。喧騒と砂埃にまみれた市場で実施したインタビューの録音データはノイズが酷いものです。それでも市場には卸のほかにも仲卸、さらには小売の露天商が無数にあり、それぞれの首都圏への転入の契機、現在の商売への参入の契機や資本の規模、組織化の有無といった活動の展開についてインタビューを行うにはうってつけでした。また、かつて南アフリカの中国系卸売店で服飾雑貨を買い付けていたICBTは、今はインドや中国の広州の案内人とWhatsAppで連絡を取りながら、自ら現地に仕入れに赴きます。人々が発展させてきたネットワークを理解するヒントを得るためには、やはり現地の社会変容を経験してきた当事者へのインタビューが欠かせません。自分自身のインフォーマントの裾野を広げるのも、そのネットワークに便乗させていただいています。



▲マプト卸売市場脇の露天商との関係は顧客なのかインタビューなのか現在も謎(2019年9月)

網中 昭世

南米での政治制度調査のコツは長く緩く

ブラジル/アルゼンチン

2014年に入所し、試行錯誤を繰り返していますが、ラテンアメリカ政治の制度的側面に注目することの多い私の現地調査の主な特徴は現時点では次の3点です。第1に、1回の現地調査の期間が長い点です。日本とブラジルやアルゼンチンの間は移動に24時間以上かかり、時差も12時間あるため、短期間に何度も往復するのは効率的ではありません。そこで、アジ研の研究会と科研の按分出張をすることにより、概ね1カ月半程度現地に滞在するようにしています。第2に、人と会うことを目的とする現地調査の場合は、なるべく「緩い」計画を立てるようにしている点です。スマートフォンの普及により、相手から突如時間や日程の変更を求められることが益々増えています。最初からタイトなスケジュールを組むと確実に破綻するため、当初の計画は同じ日にアポが集中しないようなものにしていきます。そして第3に、選挙を見ることが多い点です。選挙には各国の政治制度の特徴が如実に現れます。そのため、選挙期間中に現地調査を行うことで、選挙分析のための資料収集という調査の直接的な目的を達成すると同時に、新たなリサーチクエストを考える上でのヒントを得ることができると思います。



◀アルゼンチン・サルタ市の投票所で、電子投票に使用される「投票印刷機」を観察する筆者(2019年11月10日)

菊池 啓一